

黒部市生地地区の清水にみる地域資源と住民の関係の持続性に関する考察

松野 祐太 (東京大学 大学院工学系研究科社会基盤学専攻, matsuno@trip.t.u-tokyo.ac.jp)

福島 秀哉 (東京大学 大学院工学系研究科社会基盤学専攻, fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

A study on Sustainability of relationship between local resources and residents through analysis of Shozu in Ikuji district, Kurobe city

Yuta Matsuno (Graduate School of Civil Engineering, Tokyo University)

Hideya Fukushima (Graduate School of Civil Engineering, Tokyo University)

要約

地域資源としての水資源を再評価した名水百選や水の郷百選では、水質のみならず地域資源と住民の関係が重視された。選定された水資源はその後地域のまちづくりなどに活用されてきたが、1985年の名水百選選定から30年以上が経過し、少子高齢化の進展や生活の変化による生活利用の減少、観光地化の影響などにより、水資源と住民の関係が変化している可能性が高い。本研究では、名水百選に選定された清水(しょうず)と呼ばれる自噴井が多く存在する黒部市生地地区の共同洗い場のうち観光利用されている8清水を対象に、各清水と住民との関係の変化とその要因について、空間整備、観光地化の影響、地域活動等との関連性に着目し分析・考察した。その結果、対象8清水において生活利用が減少している一方、住民による清水の維持管理が継続しており、維持管理を通して清水と住民の関係が持続していること、および清水の維持管理に参加している住民の数は維持管理形態によって異なる傾向があることを明らかにした。加えて、維持管理の持続性に対して空間整備や観光地化の影響は小さいこと、地域の活動等の影響があることを示唆した。

キーワード

黒部市生地地区, 湧水, 地域資源, 共同洗い場, 清水

1. 研究の概要

1.1 背景

文部科学省は地域資源についての厳密な定義はないとしつつも、その特徴として非移転性(空間的に移転が困難)、有機的連鎖性(地域内の諸地域資源と相互に有機的に連鎖)、非市場性(非移転性という性格から、どこでも供給できるものではなく、非市場的な性格を有するもの)の3点を指摘している(文部科学省, 2011)。国土交通省が地域の魅力創造の手段として地域資源の活用を挙げるなど、地域資源は地域再生のための重要な要素として位置づけられており、各地域の地域資源の把握と活用は重要な課題であるといえる。

湧水や用水といった水資源は土地に固有のものであることから非移転性と非市場性を満たし、水を用いた農作物等の栽培、酒などの名産品の製造、生活での利用などから有機的連鎖性も満たす場合が多く、地域資源の特徴を有している。国土交通省が地域の魅力創造の手段として地域資源の活用を挙げた際、その一例として「日本100選に選ばれている名水」の活用に関するなど、水資源は地域住民の生活文化の継承と深く関わるとともに、地域の魅力創造に向けて重要な地域資源といえる。

生活に必要な水資源に対する関心は昭和の末頃から高まり、環境省の「名水百選」、国土交通省の「水の郷百選」などを通して、地域の水場などが地域資源として再評価された。その選定の際には、「地域住民等による保全活動があること」(名水百選)など、水資源と住民の良好な関

係があることが必須条件として明示された。その後現在に至るまで多くの地方自治体が、地域資源として評価された水資源を活かし、様々な観光施策やまちづくり活動の展開を試みており、将来の地域再生に向けた議論においても、水資源の活用は引き続き重要な課題である。

しかし、1985年の名水百選選定から30年以上が経過し、かつて水資源と住民の良好な関係が存在し、名水百選に選定されるなど一定の評価がされた水資源においても、生活様式の変化による利用の減少、少子高齢化などによる維持管理継続の困難化、さらに観光施策やまちづくり活動の影響など、水資源と住民の関係が変化している可能性が高い。これらの関係の変化の実態と要因を明らかにすることは、地域再生に向けた地域資源の活用の方策について、過去の施策の影響を含めて議論する際に重要な知見を提供すると考えられる。

黒部川扇状地は、黒部川流域の降水量の多さ、豊富な伏流水などから湧水が豊かな地域である。富山県黒部市生地(いくじ)地区(以下:生地)は、黒部川扇状地の扇端に位置し、沿岸にありながら水質の良い地下水が自噴する。生地では地下80m程から被圧地下水が自噴しており、自噴した地下水および自噴井は「清水(しょうず)」とよばれている(生地公民館, 1989)。個人で井戸を掘り、湧水を生活利用している家庭も多く存在する一方で、地域には清水を活かした共同洗い場が存在した。共同洗い場では、近隣住民が、食べ物を冷やしたり、洗濯や食器洗いをおこなったりと清水を共同で生活利用し、各共同洗い場は生活利用する住民により維持管理されていた。

これらの共同洗い場を含む生地の清水は、周辺住民による清掃活動・市による水質調査等が評価され、1985年

に名水百選に選定された（環境省，2015）。さらに、共同洗い場が地域文化として定着していること、地元住民のボランティアによる名水をめぐる「まちあるき」が実施されていることなどが評価され、1996年に水の郷百選に選定された（国土交通省，2008）。

名水百選の選定後、地域内のいくつかの共同洗い場は、黒部市の観光振興に向けた活用の対象となり、1997、1998年に行政による7か所の共同洗い場の空間整備が行われた（黒部市，2017a）。また、2001年に生地の清水を案内する黒部観光ボランティアの会が立ち上げられるなど、湧水の観光利用が本格化し、観光客や地区外からの清水の水汲み利用者が訪れるようになった。

一方で生地地区の人口は1958年の6,417人をピークに減少し、2017年3月末時点で人口は3,913人で、老年人口が37.8%と高齢化が顕著な地域でもある（黒部市，2018）。また、上水道整備や家電の普及などにより生活様式も変化してきている。

このように名水百選や水の郷百選選定後、水資源と住民の関係、それを取り巻く環境は大きく変化してきている。

本研究は、水資源が地域住民の生活文化の継承と深く関わるとともに、地域の魅力創造に向けて重要な地域資源であるという認識のもと、生活様式の変化、人口減少や少子高齢化、観光施策による空間整備、観光客の増加など取り巻く環境の変化の影響を受けていると考えられる生地の共同洗い場を対象に、水資源と住民の関係の変化とその要因を明らかにし、持続可能な地域住民と地域資源の関係の構築に向けた知見を得ることを試みるものである。

1.2 目的

本研究の目的は、地域住民との良好な関係を有する地域資源として名水百選等に選定され、その後行政による観光施策が行われた生地の清水、特に住民が共同利用する共同洗い場のうち行政の観光施策が行われた8清水を対象とし、水資源と住民との関係の変化の実態とその要因を明らかにし、地域再生のための地域資源の活用、そのための持続可能な地域住民と地域資源の関係の構築に向けた知見を得ることを目的とする。

1.3 既往研究と本研究の位置付け

水資源と住民との関係を水利用と空間の側面から分析した研究として、鈴木ら（2007）は水の郷百選に選定された滋賀県高島市の2集落を対象に、水利用と住居の配置や集落構成の関係を調査している。その結果、対象地における水路や湧水の利用が上下水道の普及・道路拡幅に伴う水路の埋め立て・生活様式の変化などによって減少したことを示している。

また吉住ら（2003）は、住民の共同利用の場でありながら観光施策の対象となった湧水の水利用について、近年観光資源として活用されている共同洗い場である島原の浜ん川湧水を対象に、住民の行動やルールの共有について分析し、その詳細をまとめている。

人口減少下における水資源と住民との関係の変化について、猪俣（2017）は、利用者の減少、高齢化の進展により維持管理の担い手が減少しているにもかかわらず、多くの水利用施設にて住民主体の維持管理が継続されている郡上八幡の水利用施設を対象に、水利用施設の維持管理の実態の変化とその要因を整理している。

以上、近年地域資源の観光活用、住民との関係変化による維持管理の困難化などの課題に対し、水資源と住民との関係を分析・考察した研究がみられるが、本研究は一地域の複数の水資源を対象とし、生活様式の変化、人口減少や少子高齢化などの社会背景と、観光施策による空間整備、観光客の増加など行政施策の影響を複合的に捉え、水資源と住民の関係の変化とその要因を明らかにすることを試みる点に特徴がある。

生地の清水、共同洗い場を対象とした研究として、川久保ら（1999）は共同洗い場である絹の清水および殿様清水の住民の利用と維持管理の実態を調査し、調査時点において既に利用の減少を指摘している。また、助重ら（2004）は地区外からの清水利用の実態について調査し、まち歩き観光の可能性と課題について検討している。このように清水と住民の関係の変化、観光地化の状況などに関する既往の研究があるものの、生地における主要な観光対象となっており空間整備の行われた全共同洗い場を対象として、近年の清水と住民の関係について分析・考察した研究はない。

1.4 対象地と生地の清水について

1.4.1 対象地の概要

富山県黒部市生地地区は黒部川扇状地の扇端に位置する海沿いの町で漁師町として発展した。生地地区には南から神明町、上町、四十物町、大町、宮川町、阿弥陀堂、芦崎の7つの町内会と、それを取りまとめる生地自治振興会が存在する。7つの全町内会で毎年新年会が開催されるなど、町内会活動が活発な地域である。

1.4.2 生地の清水と共同洗い場について

生地の共同洗い場は、洗濯や食器洗いなどの生活利用（以下：生活利用）の場として地域の住民に利用されていた。共同洗い場は通常複数の段に分かれており、一般的に上部は飲み水など、下部は洗濯などの用途に利用されるが、細かいルールは清水ごとに異なる。洗濯や洗い物などの生活利用は清水を汚すことになるため、清水ごとに生活利用をおこなうことができる住民は決まっており、その住民によって清水の維持管理がなされ、必要な費用が負担されていた。飲み水利用のための水汲みなど清水を汚さない利用は、すべての清水で可能であり、現在も地区外からの水汲み利用者が多くみられる。共同利用の清水には「清水庵の清水」などの固有の名称がつけられている。

1.4.3 名水百選選定とまちづくりへの活用

地域住民と水との関係が評価され、生地の清水は名水

百選に選定された。名水百選選定後、共同洗い場となっている清水と、一部の個人利用の清水を合わせた21の清水が町歩きマップに記載され、ナンバープレートやポールの設置などが行われた。また、名水百選選定の基準に「水質・水量、周辺環境（景観）、親水性の観点からみて、保全状況が良好なこと。」という条件があり（環境省、2015）、周辺環境整備が必須となっていたものの当時は床面にタイルが張られていない・東屋がないなど空間整備が十分でなかったことから、名水百選の基準に適合するように（ヒアリングM）1990年、1997年（環境保全施設整備事業）、1998年（県まちづくり総合支援事業）に行政による空間整備が行われた（黒部市、2017a）。現在年間5,000人程の観光客がガイドを利用する（黒部市、2017b）など観光客が増加しているほか、生地地区外からの水汲み利用者も多くみられる。

1.4.4 本研究の対象とする清水

本研究では地域資源と住民の関係に着目することから、生地の清水のうち名水百選や水の郷百選で住民との関係が評価された共同洗い場を対象とし、観光施策の影響をみるため、その中でも行政等による空間整備が行われまちあるきマップにも記載されるなど、主な観光対象となっている清水庵の清水、弘法の清水（四十物町）、絹の清水、殿様清水、弘法の清水（神明町東）、弘法の清水（神明町



図1：対象清水の位置
注：地理院地図に筆者加筆。

西）、神明町の共同洗い場、神田の清水の8つの清水（以下：対象8清水）を対象とする（図1）。

2. 手法

2.1 アンケート調査

対象8清水に関する住民の利用状況や意識の変化について把握するため、アンケート調査を行った。調査時点で清水利用の実態と利用者の全数が把握できなかったため、配布は現地調査時に清水利用者であることが判明していた住民と、生地自治振興会に協力を依頼し配布を行い（一定数（100部）配布後、必要に応じてコピーし追加するという方法をとった）、回収は生地自治振興会に依頼した。その結果2018年1月15日時点で72件（うちコピー26件）のアンケートを回収した。

2.2 ヒアリング調査

また、対象8清水について①観光に関する取り組み、空間の変化②行政施策、自治振興会の活動③各清水の生活利用や維持管理の状況に関するヒアリング調査を実施した。その概要を表1に示す。以下、ヒアリング調査の内容を示す際には（ ）内に発言したヒアリング対象者を表記する。

3. 住民と清水との関係の現状と変化

アンケート調査の結果を元に、対象8清水における住民と清水の関係の状況の変化について整理する。なお分析にあたっては、かつて対外的に評価された清水と住民との関係の変化を主な分析対象とするため、アンケート結果のうち、現在または過去に維持管理をおこなっていた35名の結果を使用した。その結果各清水の分析が困難であったため、本章では対象8清水全体の傾向を示す。

3.1 清水の利用の変化

清水の利用について、「過去、清水が最も活発に利用されていたと考える時期（以下：最利用期）」と現在の使い方についてたずねた結果を図2に示す（いずれも複数回答可）。ちなみに、アンケート結果より得た最利用期を示す年代の平均から、住民が過去、清水が最も活発に利用されていたとする時期は1971年頃と推定された（分散185）。

最利用期と現在の利用を比較すると、最利用期は、洗濯、掃除、食べ物を冷やすが多かったが、現在では洗濯、食べ物を冷やすといった利用が減少し、水汲み、掃除の利用が多くを占めている。食器洗い、食事の準備といった項目も減少するなど日常的な生活利用の減少が顕著である。また、井戸端会議の減少も生活利用の減少により住民同士の接する機会が減少した結果と考えられる。

3.2 利用減少の要因

清水の利用減少の要因に関する結果（複数回答可）を図3に示す。これより利用減少の要因として全自動洗濯機（27人）や冷蔵庫（15人）といった家電の普及に加え

表 1：ヒアリングの概要

対象者	属性	日付	内容
1	A 黒部市商工観光課	2017/10/10	現在の行政施策
2	B 生地自治振興会会長	2017/11/15	自治振興会の活動
3	C 黒部市商工観光課初代観光開発係長	2017/11/15	観光地化の経緯
	A 黒部市商工観光課		
4	D 黒部観光ガイド会長	2017/11/16	ガイドの活動
	E 黒部観光ガイド会員		
5	F 清水庵の清水利用者	2017/11/16	清水庵の清水について
6	G 絹の清水利用者	2017/11/16	絹の清水について
	H Gの職場同僚		
7	I 神明町の共同洗い場利用者	2017/11/16	神明町の共同洗い場について
8	J 弘法の清水（神明町東）利用者	2017/11/16	弘法の清水（神明町東）について
9	K 神田の清水利用者	2017/11/17	神田の清水について
10	L 四十物昆布社長	2017/12/19	黒部の地下水
	M 黒部市議会議員		
11	N 黒部観光ボランティアの会初代会長	2017/12/19	生地の生活について
	M 黒部市議会議員		
12	M 黒部市議会議員	2017/12/19	清水の抱える課題
13	O 弘法の清水（神明町西）利用者	2017/12/20	弘法の清水（神明町西）について
	P 生地自治振興会まちづくり推進員		
14	Q 殿様清水利用者	2017/12/20	殿様清水について
	R 殿様清水利用者		
	S 殿様清水利用者		
	P 生地自治振興会まちづくり推進員		
15	T 弘法の清水（四十物町）利用者	2017/12/20	弘法の清水（四十物町）について
	U 弘法の清水（四十物町）利用者		
	P 生地自治振興会まちづくり推進員		

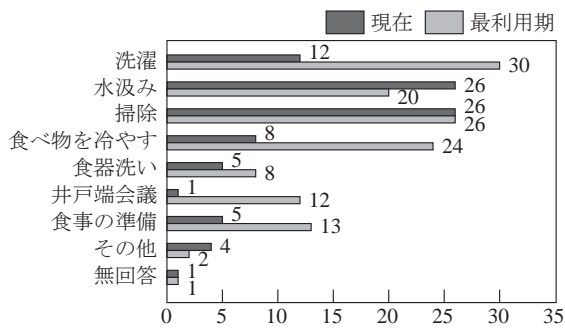


図 2：清水の利用のされ方

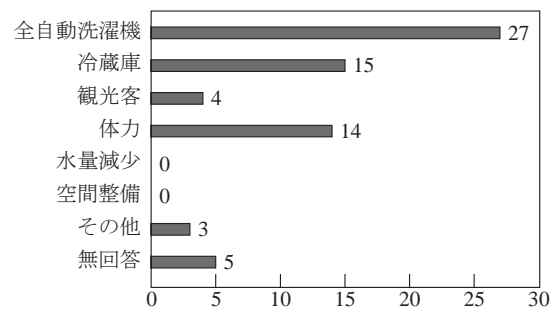


図 3：利用減少の要因

て、高齢化による体力の衰え（14人）が指摘されている。ヒアリングにおいても「みんな足がどうとか、亡くなり はったりしてだんだん減っていったんです。」（F）と述べられるなど、高齢化による体力の減退による利用者の減少が言及された。これより、過去の利用者が減少した後、新たに利用する住民の参入がなく、利用者が減少している様子が見える。

3.3 空間整備の影響

観光施策等による空間整備の影響に関するアンケート結果（複数回答可）を図 4 に示す。住民が空間整備による影響に持つ印象として生活利用の利便性の向上など、肯定的な結果が出た一方無回答者も多く、空間整備やそれによる影響に対する実感自体があまりない可能性も推察される。

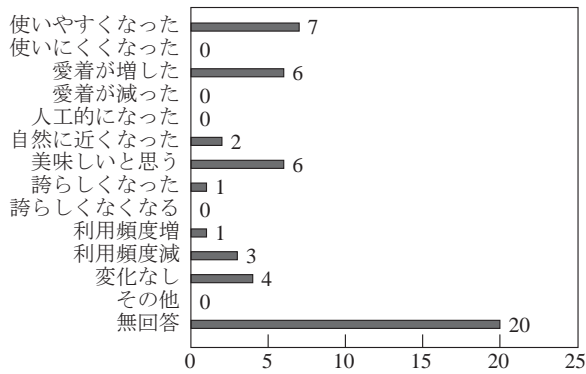


図4：空間整備の影響

3.4 観光客の影響

観光客の影響に関するアンケート結果（複数回答可）を図5に示す。観光客による影響として愛着が増した（11人）、清水が誇らしくなる（12人）など地域住民の清水に対する意識の変化への影響が多く挙げられた一方で、実際の使いやすさや利用頻度への影響に関する回答は少数であった。

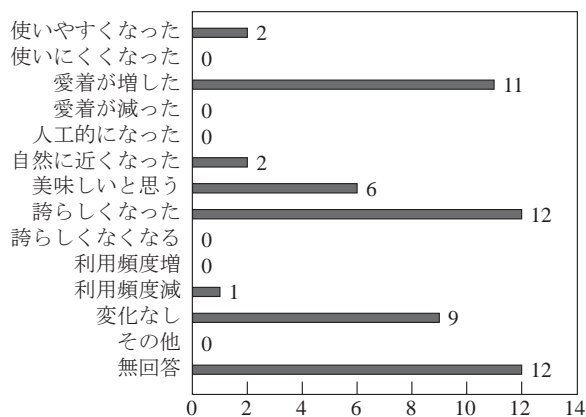


図5：観光客の影響

本来、住民の水利用は生活に密着しており、観光客の来訪により外部の目にさらされることによって、住民の清水での生活利用へ影響が出る可能性を予想していたが「利用頻度が減少した」との回答は1人にとどまった。

3.5 3章小括

3章では、アンケート調査より、対象8清水に関する住民の利用状況や意識の変化についてその大まかな傾向を把握した。その結果、洗濯、食べ物を冷やす、食器洗い、食事の準備といった、清水の生活利用が減少していること、その理由として、全自動洗濯機、冷蔵庫といった家電の普及による生活様式の変化、高齢化に伴う体力の衰えが主な理由として挙げられることがわかった。

また、ヒアリング調査から、過去の利用者が減少した後、新たに利用する住民の参入がなく、利用者が減少してい

ることがわかった。

4. 対象8清水について

4.1 関連する出来事、維持管理形態、空間整備

清水利用者や行政関係者などに対するヒアリング調査および文献調査から図6に関連する出来事、維持管理形態、空間整備の関係性、図7に各清水の詳細を整理した。

図6では、名水百選選定など国、県、市の事業や、ボランティアの会立ち上げなどの生地で出来事、および維持管理形態の変化と空間整備のタイミングなどの各清水の情報を年表にまとめた。これより、共同洗い場の空間整備やポール、ナンバープレートなどの観光案内施設の設置が名水百選選定後に行われたこと、現在すべての清水で維持管理活動が行われていること、各清水の維持管理形態に違いがあることなどがわかった。

また、調査の結果、対象8清水の維持管理形態は、当番型、個人型、町内会型、個人+町内会型の4つに分類できること（表2参照）、絹の清水、殿様清水、神明町の共同洗い場の3か所において維持管理形態の変化が起きていることがわかった。さらに、維持管理形態の変化と空間整備のタイミングをみると、維持管理形態の変化は各清水に独立して起きており、事業による施策や空間整備との明快な関連性はみられなかった。なお、神明町の共同洗い場は、移設に伴う空間整備と維持管理形態の変化が同時期に起きているが、後述の通り維持管理形態の変更は住民が自主的に行ったものである。

図7では、対象8清水の位置、維持管理形態、維持管理参加者の人数と居住地、共同洗い場の空間的特徴などを整理した。現在の維持管理参加者に着目すると、個人型が1人～2人という少人数であるのに対し、当番型では14人～23人という比較的多くの住民が維持管理に参加している。このように維持管理形態によって、明確に維持管理参加者の数に違いがあることがわかった。

4.2 各清水と住民の関係および関連事項

本節では、対象8清水ごとの調査結果を示す。

4.2.1 清水庵の清水

清水庵の清水は、中橋北側に位置する大町町内で唯一の共同洗い場であり、他の清水利用者から「大町の（清水）」と呼ばれることもある（O）。湧出量が200 L/minと生地で最も多い。共同洗い場向かいの背戸川の上には東屋、案内板、テーブル、椅子、花壇などが設置された公園が整備されている。行政による他の共同洗い場の空間整備が行われる以前の1983年に、86人の住民の協賛により新たなパイプの設置と水槽のステンレス化などの空間整備が行われ（F）、その際の寄付者の名簿が川沿いに設置されている。

昔から8班で週一度の掃除当番制をとっている。かつては一班当たり3、4人であったが、亡くなったり、足を悪くしたりといった理由で人数が減少し、若い世代は生活利用をした経験がないため、掃除にもあまり参加せ

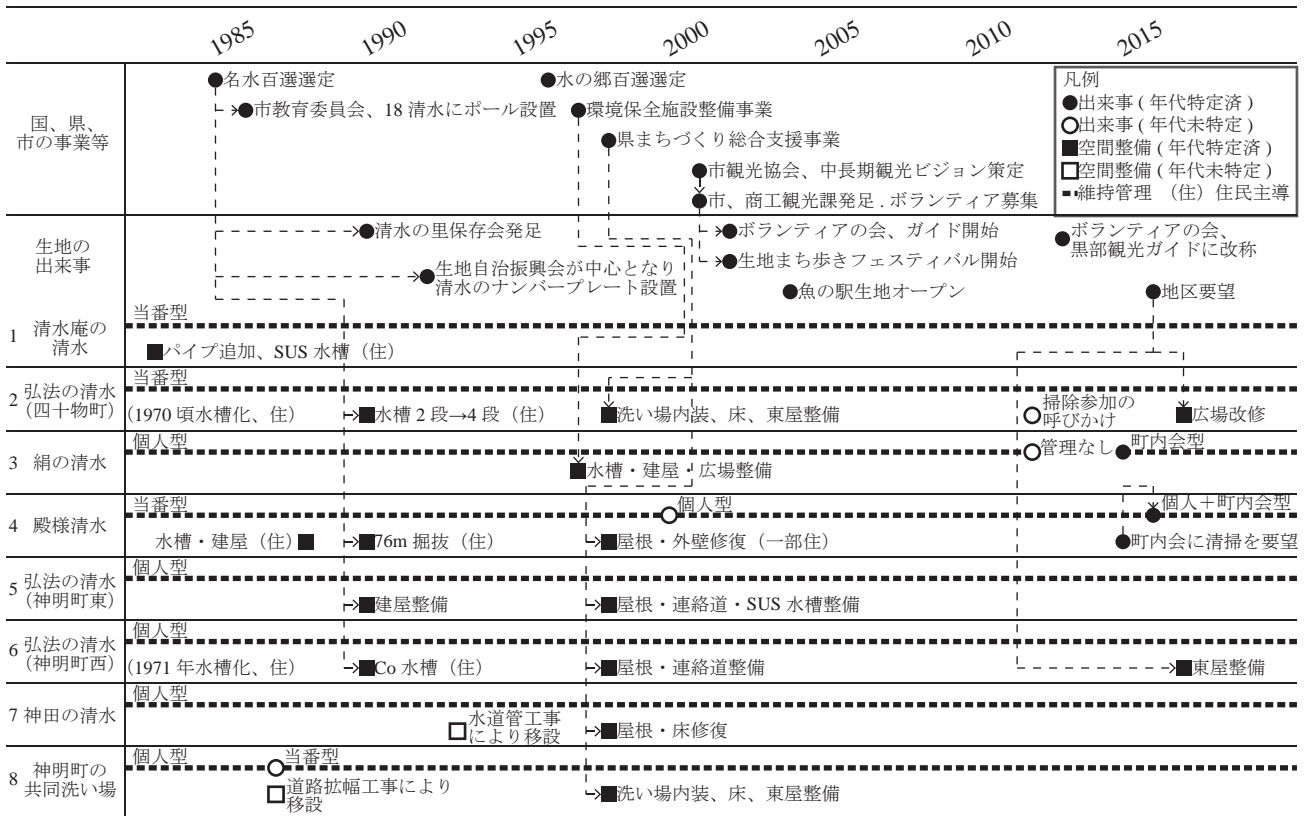


図 6：8 清水の変遷

表 2：維持管理形態の分類

当番型	当番制の清掃により利用者全体で維持管理を行う
個人型	一部の利用者が自主的に維持管理を行う
町内会型	町内一斉清掃の際に清水の清掃も行われる
個人+町内会型	個人型・町内会型の双方の維持管理が行われる

ず、現在は年配を中心に 18 人で清掃を行っている。現在は 1983 年の整備の寄付金の余剰で掃除用具の購入などを行っているが、余剰金がなくなった後は町内会が出資して掃除用具を購入することとなっている。そのほか、黒部観光ガイドから掃除用具の現物支給を受けている。

かつて生活利用していた世代は何となく清水に出るなどし、前の公園などで井戸端会議をすることがある。

4.2.2 弘法の清水 (四十物町)

弘法の清水 (四十物町) は、四十物町町内唯一の共同洗い場である。1975 年頃、1990 年の二度住民の寄付による空間整備、1998 年に県まちづくり県まちづくり総合支援事業による空間整備が行われている。寄付者の名簿が洗い場の建屋に掲示されている。1975 年ごろの整備の際に水槽が整備された (O)。この整備以前の清水について「こういうの (水槽) もなくて、その昔はですよ。こういうのもなくて砂利だけだったんです。それで上の手で食べ

物。あと下で洗濯。あとお茶碗」(O) と利用者は述べている。1990 年に水槽を 2 段から 4 段に整備し、1998 年に県まちづくり総合整備事業により、洗い場内外装、床工事、東屋建設をおこなった。

最利用期より当番型の維持管理形態が継続しているが、2012 年頃に利用者 T が四十物町内で維持管理参加の声掛けをした結果、当時 10 人程度だった維持管理参加者が増加し、現在 23 人となっている。また、T が維持管理への新規参入について「入りたいですっていう人がいたら、入れて。たまに入れてっていう人いるよね。やっぱり近いから水でも汲みに来るから、入ったほうが気楽なんでしょうね。」「でもほとんど使ってない人だよ。」と述べるなど、自主的に参加する住民がおり、維持管理への参加者が必ずしも清水の生活利用者とは限らない。共同洗い場を覆う建屋の壁には、掃除当番表が張られており、維持管理参加者の名前が可視化されている。

4.2.3 絹の清水

絹の清水は上町に位置する清水である。1997 年に黒部市が環境保全施設整備事業により空間整備を行い、洗い場の建屋や併設する広場の整備が行われた。この空間整備について利用者は「今はきれいになりすぎて、箱作って言うけれど、昔は砂地に流れてた。」(G) と述べている。

水槽ができたことで「洗濯したら藻がつくようになった。」(G) など、維持管理負担の増加が指摘された。また、

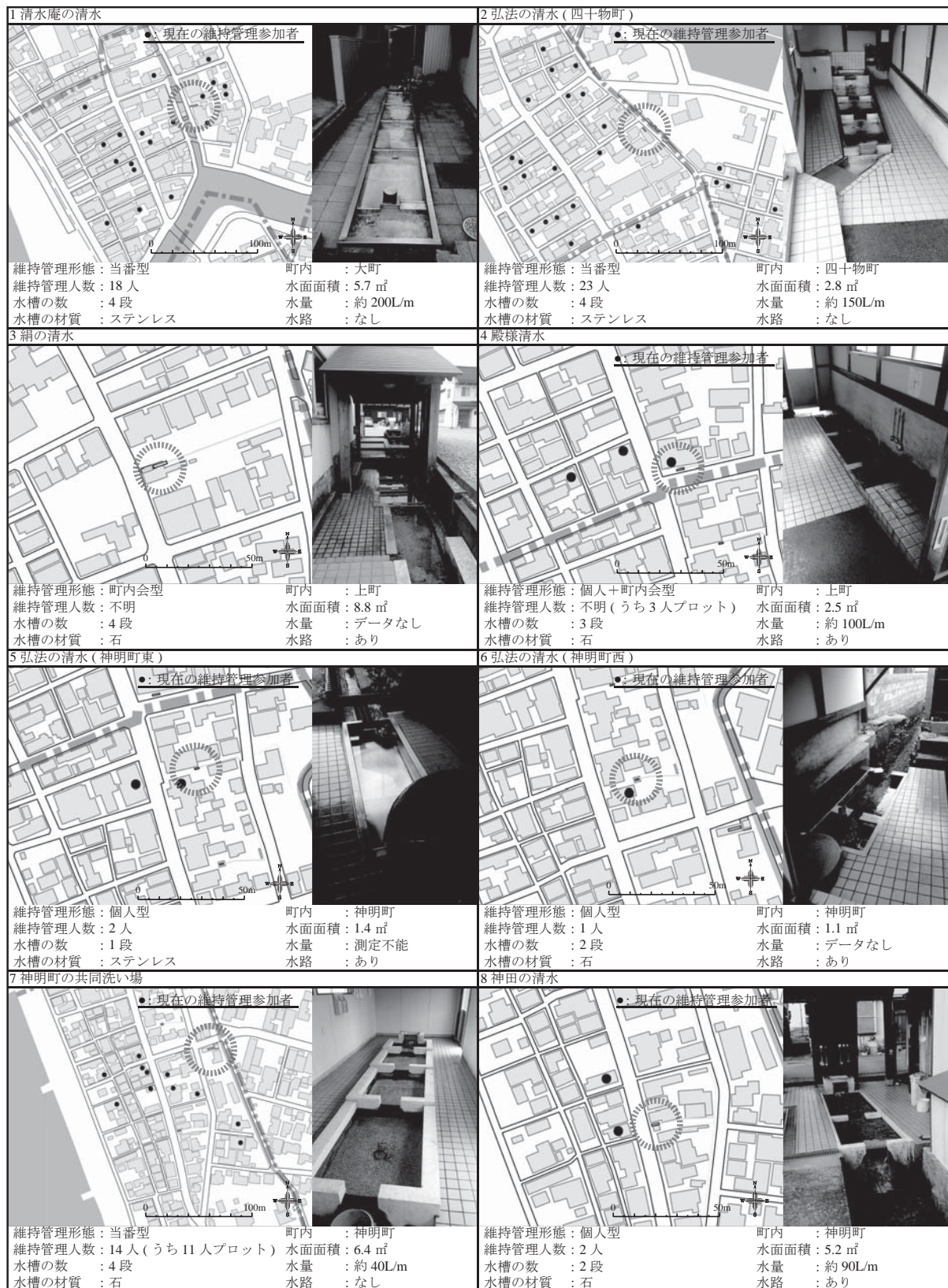


図 7: 8 清水の概要

共同洗い場に接続する水路部について、「距離も長いし、どこまでしていいかわからん。」(G)と排水のための開渠水路部に対する維持管理の負担が指摘されている。

以前から当番型の清掃は行われておらず、洗い場で顔を合わせた住民同士が「明日掃除しよう」などと話し合っ
て月に2回程度清掃を行っていた。清水の利用が減り、利用者同士が顔を合わせることが少なくなったことから2012年ごろに清掃は途絶え、2015年から町内一斉清掃の際に上町町内会の3、4班によって清掃が行われている。以前は掃除用具の会費は絹の清水利用者の団体である「清水の会」の会費から賄われていたが現在は町内会が管理している(G)。

4.2.4 殿様清水

殿様清水は上町と神明町の境に位置しており、上町側にある。1988年に殿様清水の向かいに住む住民が音頭を取り利用者から集金し水槽整備、建屋建設をおこなった。それ以前の清水は「(段に分かれておらず)ずっと一緒だった」(Q)とされており(図8)、他の清水も「そのまま流れとったけ。1本だけ流れとったね」(S)と同様の状態であった。かつては「ガチャガチャガチャ濁ってきたなくてもう使えない。」(Q)という状態であったが、水槽部分の成形により、洗濯の際に土砂が舞わなくなるなど、生活利用の利便性が向上したことが指摘された。その後水量が足りないことから、再度利用者から集金し1990年に掘り抜きが76mに掘り下げられた。1998年に県まちづくり総合整備事業により整備が行われ、屋根の吹き替えや外壁の張替えが行われた。この際にも住民が出資したとされている。また、水路部の勾配が緩く「逆流する。風が吹いたりすると」と述べられ、水が流れにくく利用しづらいついた課題が指摘された。

以前は月に1度清掃するルールがあり、大人数で集まって清掃を行っていたが、2000年ごろから使った人がその

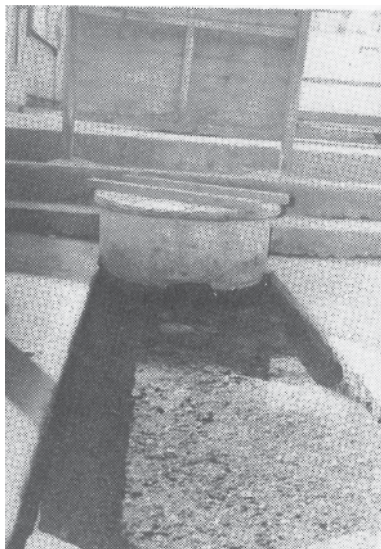


図8：かつての殿様清水の様子

注：年代不明、ふるさと生地の歴史点描より引用。

場で掃除することになっている。掃除用具は清水利用者が支払う年会費によって賄われていたが、2012年ごろから集金がなくなり、現在は会費の余剰金から賄っている。余剰金の残金が少なくなり、町内を通じて市に対し補助を要求しているが現在まだ受け入れられていない。

またかつては殿様清水でも、現在神明町の共同洗い場と弘法の清水(神明町東)のみに残っている追善供養が行われていた。追善供養は前年に亡くなった清水利用者やその先祖の供養を行い、その後お茶会を行う行事である。殿様清水では1998年を最後に追善供養は行われなくなっている。その理由として、「老化。出れなくなつてね。」(Q)と参加者の高齢化が指摘されている。

4.2.5 弘法の清水(神明町東)

弘法の清水(神明町東)は神明町に位置する。1990年に建屋の整備が行われた。1998年に県まちづくり総合支援事業により屋根や連絡道レンガ舗装などの整備が行われ、水槽がステンレス製となっている。

以前から一部の住民による自主的な維持管理が行われており、現在は清水の隣に住むJと清水の向かいに住む住民が維持管理を行っている。「私は現在今(清水を)使っておりません。」と語るJは自身が掃除を続ける理由として「この水(清水)は昔から大事な水やと思うし。」「水っていうのは親に小さい時から大事にせいって(言われた)。」などと述べている。掃除用具も自主的に住民が購入する形式が持続しており、現在は向かいに住む住民が自費で購入している(J)。

かつて利用していた住民の子供や周辺の利用者が「親光会」という会に属し、毎年2月の第三日曜日に追善供養を行っている。弘法の清水(神明町東)の追善供養は、かつて弘法の清水(神明町東)の周辺に居住していたが現在は転居し、神田の清水を利用しているKが毎年主催している。現在は清水を利用していない住民も追善供養には参加し、「みんなやめようなんて言わない。皆さん楽しみにして、年齢はバラバラですけど」(J)と大切にされている。一方でKが追善の主催をやめた場合、継続されない可能性があり、「いつそれ終わるかもわからないよ。来年終わるかも。」(J)とも言われている。

4.2.6 弘法の清水(神明町西)

弘法の清水(神明町西)は神明町に位置する。以前は湧水がただ湧いている状態だったが1971年頃に利用者から集金し井戸部が現在の形に整備された。その後1990年に利用者から再度集金し、水槽を現在のコンクリートの形態に整備した。1998年に県まちづくり総合支援事業により屋根や連絡道レンガ舗装などの整備を行い、2017年に地区要望に応じる形で東屋の整備が行われた。

維持管理は一部の利用者が自主的に行っており、現在は自分の家の庭から直接清水に出ることができる隣の住民が掃除を行っている。掃除用具費用は足りなくなったときに利用者から集金することで賄っていたが、現在は集金は行われず残金から賄っている。集金は2006年まで

は行われていたことが確認できている (O)。

4.2.7 神田の清水

神田の清水は神明町に位置する。以前は現在の位置より海側の現在道路が走っている場所にあったが1993年の水道管工事の際に今の場所に移設した。移設以前は海が荒れた際に洗い場も汚くなり不衛生であったことから移設の際に洗い場の高さを現在の高さまで上げ、掘り抜きを80mの深さにしている。昔の自然の状態を壊したくないという要望から水槽の底に砂利が敷いてある。1998年に県まちづくり総合支援事業により屋根吹替や床タイル張りなどの整備が行われた。

維持管理は一部の利用者が自主的に行っており、現在はKともう一人の住民が行っている。Kが周辺の住民から集金することで掃除用具費用などを賄っているが、全員が頻繁に清水の生活利用をしているわけではない (K)。

4.2.8 神明町の共同洗い場

神明町の共同洗い場は神明町に位置する。1987年頃の道路拡幅の際に現在の位置に移転した。それ以前の洗い場は現在のものより小さく、掃除の負担が小さかったが、現在の位置に移転する際洗い場が大きくなり、清掃の負担が増した。これを契機に共同洗い場を生活利用する住民が話し合い、維持管理形態を個人型から当番型に変更した。この変更は地域住民が自主的におこなったもので、空間整備を行った行政と維持管理形態のあり方に関する相談はなかったという。1998年に県まちづくり総合支援事業により、洗い場内外装、床工事、東屋建設をおこなった。

その後、現在でも当番型の維持管理が続いているが、生活利用、維持管理参加者ともに減少している。その理由として「亡くなって。あんまり若い人はこの辺に住んでなくて、亡くなってかれたらそれで消滅。」(I)と聞かれるなど、生活利用していた住民の減少後、新規の利用者がいないことなどが要因として挙げられている。

神明町の共同洗い場では、清水の清掃当番参加者による「清水の会」が存在するが、一部体力などの面から清掃に参加できなくなった住民も含まれている。清水の会は毎年1月3日に前名寺にて追善供養を行っている。追善供養は、清掃に参加しない住民も含め、年に一度清水の会の会員が一堂に会する機会であり、「追善には必ず来られるよ。だって自分たちのおじいちゃんばあちゃんの法名が載ってるわけだからね。大事なことからね。」(I)と利用者が語るように、参加者に大切にされている。「清水の会」の追善供養は、清水の会の住民の中から交代で選ばれる追善当番によって運営されており、追善の当番を1人が続けている弘法の清水(神明町東)に比べ、運営の負担が分散しかつ多くの会員が中心的な役割を担うシステムになっている。

神明町の共同洗い場では、かつて水槽をステンレスにするか現在の石にするかで利用者で多数決をとった際に、情緒があるという意見が多く現在の水槽が採用された。

しかし、「磨く磨くしてたら石がかけてくわけ。そしたら汚れが酷くなって、酷くなって、だから掃除が大変なんだ。」(I)など掃除の負担に対する不満が出ている、

4.3 4章小括

清水の生活利用は減少している一方で、対象8清水全てで現在も地域住民による維持管理活動が行われていること、清水によって維持管理形態に違いがあり、その維持管理形態は当番型、個人型、個人+町内会型、町内会型の4つに分類できること、中でも当番型は、他の維持管理形態に比べて、現在も定期的に頻度高く清掃が行われ、維持管理参加者が多いことがわかった。

また、維持管理を取り巻く状況は清水によって異なるが、その継続性の要因について、現在清水を利用していないものの維持管理を行っている利用者が「この水(清水)は昔から大事な水やと思うし。」(J)と答えるなど、清水が生活文化として大切なものであるという認識から、維持管理を継続している様子が伺える。5章では、外部からの変化が清水と住民との関係に与えた影響について確認した上で、地域の生活文化の影響についても考察をおこなう。

5. 分析・考察

5.1 清水と住民の関係への行政施策・観光地化の影響

5.1.1 空間整備の内容と生活利用

殿様清水で指摘されたように、元来各清水は段に分かれておらず砂地から湧いて流れている状態であった。その後水槽型に成形をしたことで土砂が舞わなくなるなど利便性が向上した一方、藻が発生するなど新たな課題が発生し、その解決策として現在はステンレス製の水槽整備がおこなわれている(「藻がたくさんつくのよ。それが1番つきづらいのは何かっていうとステンだった。」(N))。

1980年代までの整備の多くは住民主導で進められていたが、1990年代より補助事業を受けた公共整備が進められている。黒部市の資料(「生地の清水」施設改修補助金)によると、具体的には洗い場内外装、床工事、床タイル張り、東屋新設、連絡道レンガ舗装、水槽人造石研ぎ出し、広場整備などが行われている。このような一連の空間整備について、3.3で示したアンケートでは空間整備の影響に対し肯定的な結果が出た一方で、個々の清水では水槽部分の形態を中心に、生活利用の利便性や維持管理活動の負担に直接影響してきたことがわかる。しかし、対象8清水において、この空間整備の結果が、維持管理活動の形態の変化や継続性に影響した形跡はみられなかった。また、行政の観光施策による対象8清水の空間整備の際、計画主体である行政が、各清水の生活利用者を中心に住民主体で行われていた維持管理の形態について十分考慮した様子はみられない。

4.1で述べたように住民と清水の関係の持続において、生活利用に比して特に重要な役割を果たしていると考えられる、各清水と住民の関係において形成されてきた維持管理の継続に対し、これまでの行政の観光施策による

空間整備は、そのプロセス、結果ともに直接影響していないことが示唆される。

5.1.2 観光地化による影響

次に維持管理に対する観光客の影響について分析する。アンケート結果より、観光客による変化として「愛着が増した」(11人)「誇らしくなった」(12人)という肯定的回答が多く、住民の清水に対する意識の変化にある程度影響したことが指摘できる一方、「使いやすくなった」(2人)「使いにくくなった」(0人)「利用頻度増」(1人)「利用頻度減」(0人)といった生活利用への影響に関する回答は少なかった。ヒアリング調査においても維持管理に関連した観光客の影響については言及がなかった。これらの住民の認識の傾向の要因として、本格的に観光活用が始まった2000年代にはすでに生活利用が減少していたこと、観光客の利用は水を飲む、汲むといった生活利用以外の利用に限られ、維持管理の負担を増加させないことから、その影響があまり強く認識されていない可能性がある。

5.2 清水と住民の関りに対する地域社会の影響

ここでは、現在も多くの住民が維持管理に参加し、比較的清水と住民の関りの持続性が高いと考えられる当番型維持管理の清水に着目し、その持続性の要因を地域の生活文化との関係性から考察する。

先述のように神明町の共同洗い場では、清水の追善供養が現在も続いており、清水の会の会員が一堂に会する機会として大切にされ、その運営も当番でおこなわれている。吉住ら(2003)は、島原湧水群の共同洗い場である浜ん川の利用内容の調査において、水汲みや洗濯といった湧水利用だけでなく、情報交換や利用の教えあいによるコミュニティの場の形成が行われていること、水神様へのお祈りのみの利用も存在し神仏との関りが洗い場と住民のつながりを補っていることなどを明らかにしている。このように直接的な生活利用とは異なる場の形成が地域資源と住民の関りに影響を与えることが考えられる。浜ん川の場合と異なり、神明町の共同洗い場の空間自体に水神様などは設置されていないが、追善供養による先祖とのつながりが大切にされている。また、追善供養と当番型の維持管理はどちらも清水の会の会員が行っており、体力面の問題を抱えているなどの特殊なケースを除き、追善供養に参加する住民が当番型の維持管理を行っている。先祖の供養を行い、コミュニティの場ともなっている追善供養が、神明町の共同洗い場で当番型維持管理が継続していることを支えている可能性がある。

4章で述べたように弘法の清水(神明町東)は、追善供養が継続されているものの、その運営は個人によるものであり、清水の維持管理同様持続的な体制のもとでの運用とは言い難い。また、殿様清水ではかつて当番型の維持管理が行われていたものの、追善供養途絶後に当番型の維持管理から個人型の維持管理に移行している。これはコミュニティの場として機能していた追善供養が途

絶えたことで当番型の維持管理を続けることのインセンティブが小さくなった影響と解釈することもできる。本論ではその詳細な関係性までは掘り下げられていないが、清水の維持管理体制と追善供養に関して何かしらの関連性が示唆される。

また、神明町の共同洗い場以外で当番型の維持管理が行われている清水庵の清水と弘法の清水(四十物町)では追善供養のような維持管理参加者が行う行事は確認できなかったが、これら2清水は町内に唯一の清水であるという共通点がある。もともと生活利用をした住民が維持管理を行うのが清水の維持管理の形式であったが、現在は同じ町内の生活利用をしていない住民が当番型の維持管理に参加している。先述のように町内会の活動が活発である弘法の清水(四十物町)において「(掃除当番に)入ってたほうが気楽」(T)と利用者が述べるなど、町内会活動の活発な生地で生活するうえで当番型の維持管理に参加することが他の維持管理参加者との結びつきを強め、町内のコミュニティとも関りを深めることになるという効果をもたらしている可能性がある。

以上より、当番型の維持管理が行われている3清水では維持管理が水資源と住民の閉じた関係の中ではなく、追善供養や町内会を通じた地域での生活など、生活に関わるコミュニティの場や生活文化と関連した性格を持っていること、およびそれが維持管理の持続性に影響している可能性を指摘することができる。

5.3 実践的課題解決に向けた考察

ここで、清水の維持管理について、清水の観光活用を進めてきた市や観光ガイドの態度を確認すると、「その清水を利用してる近辺の方が…中略…日ごろの管理者という形になります。」(B)、「市の職員が掃除したり、そのメンテナンスをしたりということは無くて…以下略」(A)、「基本は町内管理ですから、それはきちんとやっておられたんですけど。最近はおそらく難しいでしょうね。高齢化と、意識がやっぱり低くなってきますし。観光開発、要するにお客さんが来て、なら市がやってくれっていう話になってくるんじゃないかな。」(C)と、課題を認識しつつも一貫して利用者である地域住民がその担い手であるという当初の方針を継続している。

このことは、過去の補助事業による空間整備の結果が、各清水の維持管理活動の形態の変化や持続性に大きく影響してこなかった要因の一つであると考えられる。さらに、その背景には、水資源と住民の良好な関係を基盤とする地域資源としての清水の評価や、追善供養、町内会の影響にみられるように、そのあり方が地域の生活文化に根ざしているという認識の共有が深く関係していると思われる。確かに計画主体の不用意な介入により地域資源の価値が喪失した事例は多く、地域資源を活用した観光施策や地域再生を打ち出す行政が、地域の生活文化と関連性が深い維持管理活動のあり方に踏み込まないという態度は一つの正しい選択といえる。しかし、ヒアリングでも聞かれたように、人口減少、高齢化、生活様式の

変化等により、その体制には限界がきているといえ、計画主体と地域住民が協働する新たな維持管理体制の構築が望まれる。その際には、公園などを対象に議論が蓄積されてきた、計画策定時の住民参加から住民管理運営組織の設立までの継続性に関わる知見などが参考になると考えられる（川原他、2006）。

さらにその際、本論の調査でも明らかのように、同地区の対象8清水に限ってもその置かれている状況は多様であり、地域の生活に密着したインフラの文化的側面を計画に含む場合は、地域活動などを含めた複合的な視点からみたミクロな地域単位の生活文化の差異、特性の読み込みをその前提に置く必要がある点に留意すべきである。

5.4 まとめ・今後の課題

5.4.1 本研究の成果

本研究の成果は以下の通り。

- 名水百選に選定された黒部市生地地区の清水のうち、観光活用されている8清水を対象に、生活利用や維持管理の実態を調査し、生活利用が減少している一方、全清水で維持管理活動が継続していることを示した。
- 利用者のアンケートより維持管理の持続に対する空間整備や観光客の影響は比較的小さいことを示した。
- 対象8清水において維持管理が継続していること、維持管理形態は当番型、個人型、町内会型、個人+町内会型の4つに分類できることを示した。
- 維持管理形態によって維持管理参加者の住民の数に差があり、当番型が比較的多いことを明らかにした。
- 当番型の維持管理が行われている3清水は、維持管理が水資源と住民の閉じた関係の中ではなく、追善供養や町内会など、生活に関わるコミュニティの場や生活文化と関連した性格を持っていること、およびそれが維持管理の持続性に影響している可能性を指摘した。

5.4.2 今後の課題

生地の観光施策における清水の空間整備では、生活利用の利便性を向上させる建屋の建築・水槽の形成や維持管理の負担を低減する水槽のステンレス化などが行われた。しかし5.3の考察等を踏まえると施策の実施において、そのような維持管理の効率性、利用時の利便性の向上に留まらず、維持管理による地域資源と住民との関係の持続性に寄与すべく、維持管理活動自体を、地域活動や地域コミュニティと接続したものにしていける取り組みが重要である。

今後、地域資源と住民の関係を活かしたまちづくりを計画する際には、このようなミクロの各地域の生活文化に根ざした維持管理の形態や地域社会のあり方を調査・分析し、地域資源と住民の関係を地域の生活文化の中に組み込んでいくための計画論を確立することが重要である。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、黒部市生地地区の住民の皆様、コミュニティセンターの皆様をはじめ、多くの方にお世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

引用文献

- 生地公民館（1989）. ふるさと生地の歴史点描.
- Inomata, S. (2017). 郡上八幡における水利用施設の保全に向けた空間整備のための一試論—管理し得る主体と空間の在り方に着目して—.
- 川久保典昭・佐藤友美・國澤恒久（1999）. 富山県黒部川扇状地における湧水利用—黒部市生地地区の共同洗い場を事例として—. 黒部川扇状地研究所紀要, 24, 37-47.
- 川原晋・大木一・佐藤滋（2006）. 計画策定期の住民参加状況と空間要素とが公園の継続的な住民運営に与える影響—住民主体の地区まちづくりマネジメントにつながる計画・運営のプロセスデザイン—. 日本建築学会計画系論文集, Vol. 71, No. 601, 119-126.
- 環境省（2015）. 「名水百選」について. <https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/meisui/info/kijyun.html>.（参照2018-4-24）
- 環境省（2018）. 黒部川扇状地湧水群. <https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/meisui/data/index.asp?info=29>.（参照2018-4-24）
- 黒部観光ガイド（2017）. 黒部観光ガイド作成資料.
- 黒部市（2017）. 「生地の清水」施設改修補助金.
- 黒部市（2017）. これまでの利用者数（推移）. 平成28年度版.
- 黒部市（2018）. 黒部市の人口推移. <https://www.city.kurobe.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=345>.（参照2018-10-1）
- 国土交通省（2008）. 水の郷百選 富山県黒部市. <http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/shichoson/hokuriku/kurobe.htm>.（参照2018-4-24）
- 助重雄久・生地の清水研究グループ（2004）. 富山県黒部市生地地区における湧水の利用—「清水めぐり」を中心としたまち歩き観光とその課題—. 富山国際大学地域学部紀要, 4, 81-93.
- 鈴木尚美子・畔柳昭雄（2007）. 水網集落における水利用形態と建築空間に関する研究—滋賀県高島市の2集落を対象として—. 日本建築学会計画系論文集, Vol. 72, No. 611, 7-14.
- 文部科学省（2011）. 地域資源の活用を通じたゆたかなくにづくりについて. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu3/shiryo/_icsFiles/afield-file/2011/03/28/1303081_11.pdf.（参照2018-4-24）
- 吉住優子・鈴木毅・木多道宏・舟橋國男・李斌（2003）. 洗い場の持続的共同利用の仕組みに関する研究—長崎県島原市船津地区“浜ん川”を事例として—. 日本建築学会計画系論文集, Vol. 68, No. 564, 187-194.

Abstract

In the “Meisui-Hyakusen” and “Mizu-no-Sato-Hyakusen” in Japanese, or “Selected 100 Exquisite and Well-Conserved Waters” and “Selected 100 Villages of Water”, which has re-evaluated water resources as the local resources at the same time, the relationship between the residents there and the local resources have been considered important in addition to its quality of the water, and the urban planners have made full use of these selected water resources for the planning. However, since more than 30 years have passed since “Selected 100 Exquisite and Well-Conserved Waters” was selected, the relationship is likely to have changed because of these resources becoming tourist’s attraction and the decrease of the usage of these resources due to the progress of declining birthrate and aging society or the change in lifestyle. In the site of this research, Ikuji district, Kurobe City, Toyama Prefecture, Japan, there are lots of “Syozu”, or artesian wells, and we focused on eight of them, which have been selected as “Selected 100 Exquisite and Well-Conserved Waters.” These eight artesian wells there are used commonly by the residents there and now also by tourists. We analyzed the changes and the reason of them of the relationship between eight these wells and the residents there, focusing on the spatial improvement project, effect of becoming tourist’s attraction, and the local activity. As the result, we found out the decrease of the usage of these wells by the residents in daily life, the sustainable relationship between the wells and the residents there through the operation and the maintenance of the wells, and the difference in the number of the residents participating in the operation and the maintenance depends on the form of it. In addition, it is suggested that local activities affect the sustainability of operation and maintenance, while spatial improvement and the change to the touristy place do not affect that much.

(受稿：2018年10月1日 受理：2018年12月11日)